

「あ……っ」

パリンッ、という乾いた音が、誰もいない午後の給湯室に虚しく響いた。

（またやっちゃった……）

床に無惨に砕け散った、お気に入りだったはずのマグカップ。その破片と、漏れ出したコーヒーのシミを見つめて、僕は情けないため息をついた。洗おうとして、手が滑ってしまったんだ。最近、仕事のミスが続いていて、ただでさえ自信を失いかけていたのに。自分用のコップ一つ満足に扱えない自分に、情けなさがこみ上げてくる。

「……またですか。先輩は本当に、危なっかしいですね」

「えっ……！？」

背後から降ってきたのは、どこか甘さが混じった

低い声。振り返る間もなく、すぐ近くで、清潔な石鹸と品の良い香水の匂いがした。

「か、魁平くん……！ ごめん、すぐに片付けるから……っ！」

慌ててしゃがみ込もうとした僕の視界に、完璧に磨かれた革靴が映る。顔を上げると、そこには乱れ一つないスーツを着こなした、後輩の魁平くんが立っていた。

僕より数歳年下なのに、部署で一番の数字を出し続けるエリート。

常に冷静沈着で、感情を表に出さない彼は、周囲からも一目置かれている。その整った顔立ちも人目を集める要因で、理知的な眼鏡の奥の鋭い瞳にじっと見据えられるだけで、なんでも言うことを聞いてしまいそうになると、社内の女性たちから評判だ。

「僕がやりますよ」

「いや、破片とか危ないから」

「いいですよ。というか、そう言って先日は割れたコップの破片で手を切っていましたよね。また切られでもしたら困りますから」

「うう……、すみません……」

魁平くんは手際よく破片を集め、まとめていく。その間、僕は雑巾で床を掃除した後で、すでに洗った別のコップを布巾で拭いた。

そうしていると、「あとは僕がします」と言って、僕の手からふきんを取り上げた。

その時、指先がかすかに触れ、心臓が跳ねた。熱い。ほんの一瞬触れただけなのに、そこから心臓まで電流が走ったかのように、体温が跳ね上がる。

「……先輩は一生懸命なのは認めますが、自分のキャパシティを把握できていない。もっと自分を管理すべきです」

魁平くんはまるで教え子を見るような、静かな圧を孕んだ視線で僕を見下ろした。

「うん、気をつけるよ……」

「口だけでは困ります。ちゃんとしてください」

「う、うん……」

（ダメだ。魁平くんにそう言われると、何も言い返せなくなる……）

「これ以上、その綺麗な手を傷つけるのは困りますよ」

「そ、そんなこと……っ」

僕は顔が赤くなるのを隠すように俯いた。魁平くんは手際よく掃除を終えると、ふきンを返そうとして——けれど、その手は僕の胸元で止まった。

「……先輩。さっきから呼吸が浅いですよ。身体も強張っている」

「えっ、あ……それは……」

（魁平くんが変なこと言うから、緊張してるから……なんて言えない）

「そんなに肩に力が入っているから、手元が狂うんです。……先輩は、自分の身体の制御すらまともに

できていない」

魁平くんはふきんをカウンターに置くと、僕の背後に一步、音もなく踏み込んできた。

「ひゃっ……！？」

(……っ、近い……！ 背中に、魁平くんが……っ)

逃げようとしたけれど、背後には彼がいて、前にはステンレスのシンク。僕は彼の腕の中に閉じ込められる形になった。

魁平くんの大きな掌が、僕の両肩をガシリと包み込んだ。熱い。ワイシャツ越しでも伝わる彼の体温に、背筋にゾクゾクとした震えが走り抜ける。

「無駄な力が入りすぎです。僕が抜いてあげますから、じっとしててください」

耳元で囁かれるたびに、彼の熱い吐息が首筋を撫でた。

「あ、の……魁平くん……？」

魁平くんはゆっくりと肩から手を離すと、ずっと僕の正面へと回り込む。逃げ場はない。魁平くんは一步、僕のパーソナルスペースを当然のように踏み越えてきた。

「先輩のために言ってるんですよ。わかりますね？」

魁平くんの大きな掌が、僕の頬をそっと撫でた。その指先はそのまま首筋を滑り、鎖骨の窪みをなぞり、ゆっくりと胸元へ向かった。

「え！？ ひゃっ、やめ……っ！」

シャツのボタンに、彼の指がかかる。パチン、パチンと、静かな室内でボタンが外れる音が響く。

僕の身体には、小さいけれど女性のような柔らかいおっぱいと、その下には女性器がある。僕は全人口の約5～7%にあたる、カントボーイだ。

そして魁平くんはそれを知っている。前に酒に酔い潰れたとき、介抱してくれた魁平くんとうっかり話してしまったからだ。

（な、なんで……っ、魁平くん……っ！？）

混乱している間にも彼の指は止まらず、あっという間にシャツがはだけ、インナーの上から、魁平くんの大きな手が僕の膨らみをぎゅっ、と驚掴みにした。

「んんっ……！？♡」

指がゆっくりと動き、むにゅ♡と柔らかさを確かめるように、深く揉み解していく。指先が生地を押し込み、尖った乳首の先端を強引に探し当てる。ぐにぐにと押し潰される感覚に、頭の芯が痺れるような快感が広がる。

むにゅむにゅ♡むにゅむにゅ♡ぐにぐに♡

「ふ、あ……っ、はぁっ、んんっ……♡」

年下に見られている羞恥と、彼になんでもいうことを聞いてしまいそうになる。身体の芯がじんわりと疼き始める。

むにゅむにゅ♡ぐにぐに♡ぐにぐに♡

「あ……ぁんっ、あ、だ、め……♡」

「……どうしたんですか。もっと、力を抜いてください」

低く淡々とした声が、僕の耳元で熱く響く。冷たいステンレスと魁平くんの逞しい身体の間挟まれて、僕はただ翻弄されるしかない。

「……んんっ、あ……っ！ 魁平、くん……っ♡」

魁平くんの大きな掌が、ズボンの隙間から、太ももの内側をさらりと撫でた。

「っ……！」

（うそ、そこまで……。なんでこんなこと……。っ！
？）

戸惑う間もなく、彼の指先はさらに奥へと滑り込み、下着越しに僕のおまんこを揉み始める。

ぐにゅ♡ ぐにゅ♡ ぐにゅ♡ ぐにゅ♡

「あ♡ んんっ♡ 魁平、くん……。っ♡」

「……。何ですか？ まだ抵抗する力が残っているようですね」

（そんなこと言われたって……。君の手が熱すぎて、頭の中がぐちゃぐちゃなんだよ♡）

「もっと楽になれるよう、僕が管理してあげますから♡」

「あ、だめ……。やめて、魁平く……。っ♡ んん♡♡」

もにゅ♡ もにゅ♡ むにゅううっ♡ ぐにゅ♡

「布越しでも、先輩がどれだけいやらしい状態かよ

くわかりますよ♡」

魁平くんの指が、割れ目に食い込んだ布をぐいぐいと押し広げるように動く。強い摩擦に、ナカから溢れ出した蜜がじゅわ♡と下着を湿らせていく。

「ひゅっ♡♡」

（指が、食い込んで……っ！♡布越しなのに……ッ♡いま、クリ触ったぁ♡）

「やん♡だめえ♡そこは……♡」

「……少しは素直になってきましたね♡もっと深く教え込んであげます♡」

魁平くんは冷静な口調のまま、指を執拗に動かし続け、下着の上から割れ目をなぞる。じゅわっ♡と自分の中から蜜が溢れ出す感覚に、僕はもう逃げる気力も失っていく。

「あっ、あん♡ん、あ……ふうう♡♡」

「随分と濡れていますね。後輩である僕に触られて